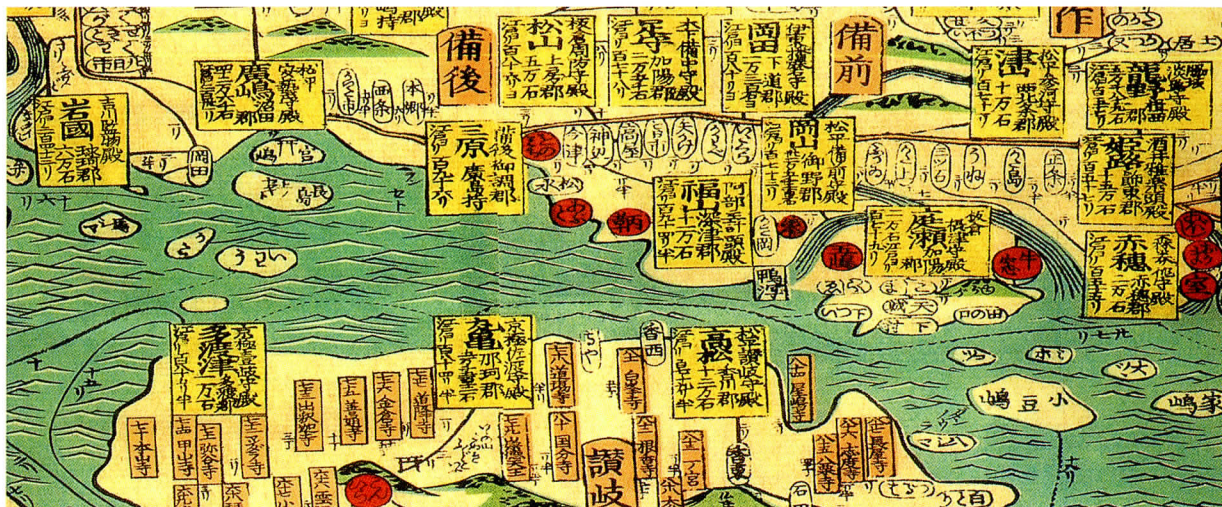


江戸時代の旅行

～ある伊勢参宮日記から～



大日本行程大絵図(幕末)

◆お伊勢まいり

お伊勢まいりは、江戸時代の後期ころから庶民の間に広まり、「一生に一度は参りたい。」という願いを持つようになりました。

その理由として、神宮の御師が日本中に出かけ、信仰を勧めたり、参宮する人々の案内や宿泊の世話などして積極的に全国の信者との結びつきを強めていったこと。日本を訪れた朝鮮通信使やヨーロッパ人も、「これまで訪れたどの国よりも道路が整備されている。」と本国に報告しているほど、旅行の施設が整っていたこと等をあげることができます。

◆江戸時代の庶民の旅行

江戸時代の人々は参宮に限らず、いつでも自由に国外(藩外)に旅行することはできませんでした。福岡藩の定書によると旅行ができるのは、歩明の期間(旧暦11月朔日から翌年4月14日)で、参宮などの長期の旅行は年が明けてからの出発が普通でした。また、参宮旅行が許される日数は百日以内、その他の国外旅行は願い出によって日数が決められていました。

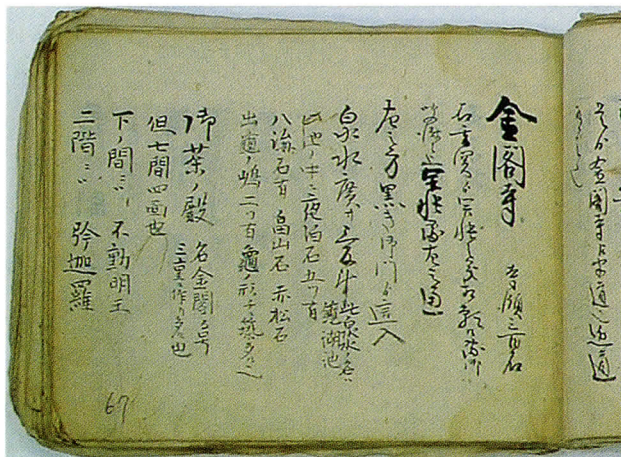
次に、旅行の許可証と身分証明書を兼ねた往来手形を身につけなければなりません。これは、関所・番所を通るときには是非必要な書き付でした。

◆参宮旅行記の概要

嘉永2年(1849)2月6日に山家(現福岡県筑紫野市山家)を出発し、同年閏4月3日に帰着。86日間の長旅で同行3人、従者2人を伴い、5人での旅です。

一行は長崎街道を経て下関に至り、山陽道の各地を見物、2月12日に宮市(防府市)に到着しました。ここから赤穂まで船旅となり、翌13日午前出帆、途中岩国・宮島・広島にそれぞれ停泊し、錦帯橋や厳島神社、広島城下や、寺社などを精力的に見物しています。

同20日には多度津に到着し2日停泊、その間金毘羅宮に参詣。その後乗船し、順風に恵まれた一行は24日五ツ時赤穂に到着。船賃2両を支出、これは舟の胴の間及び艫の間2間を貸切にしたため、このような金額となっています。因みに船名は「源祥丸」、乗客19人、船頭・舟子(水夫)3人でした。



伊勢参宮日記の一部(3月11日金閣寺)

赤穂に至るまでの寺社や古跡の見物記録は百か所余りに達し、その主な事柄は建造物の規模、石灯笼の数、石段の数、感想など細かに記述されています。また、船中の人間関係、風待ち、乗客の船酔いの様子など詳しく表現され興味深いものです。このような記録は帰着の日まで筆に留めています。

上陸後は陸路で姫路、明石、舞浜(舞子)の景色や名所・古跡を訪ね、多くの記録を残していますが、その中に店の客引きとの掛け合いを楽しんでいる様子が多く残されています。

或る茶屋では客引きが、「お客さん、ようお寄り、この松は相生の松、この鐘は尾上の鐘と申します。あれ御覧あれ、…でござる。お茶あがれ、…この餅は寿命の餅と言うて、一つこれをあがりますと百六ツ迄長寿いたします。」と早口にいう事、筆紙にも口にも書き留めがたく、余り面白さの弁舌、あらあら書き留め申し候。たわむれに、「その餅一ツ食い、二ツ迄食ったら二百迄も長寿、長すぎよう。」「それでは子や孫やが迷惑いたしますやならん。」と口より出ほうだい大もの言うて、うち笑いつつ立ちいでけり、と記しています。

旅を楽しみながら一行は、大阪から舟便で伏見に着いたのが3月2日、京都で11日間見物し同14日東海道を下り、宮(熱田)へ向かいます。途中、鞍馬山、比叡山、石山寺、名古屋城下を経

て熱田神宮に参詣。宮から伊勢湾を桑名までの船便を利用し、19日朝五ッ時(8時)ごろ出帆、舟は途中無風状態になり、桑名に上陸したのは8ッ時(午後2時)頃で船賃は1人68文支払っています。

四日市、松坂を経て御師の高向二頭太夫の茶屋に到着したのは21日でした。ここで身を整えると二頭太夫の家へ案内され、大変接待を受け、そこに宿泊しています。この日、御初穂金として銀1分納めています。

翌22日は、二頭太夫の案内人に伴われて念願の内宮・外宮参拝、見物などを終えます。翌日別れの挨拶のため御師の家に赴き、別れの盃と二の膳つきのご馳走にあずかり、帰途につくことになります。

帰路は、初瀬寺・奈良などで4日ほど見物し、高野山、和歌山を経由して4月4日に大阪に到着、16日まで滞在し、いよいよ翌17日に大阪を出帆、数か所寄港の予定が風待ちや風雨のために3日ほど停泊し、退屈な日を送ったことも記されています。

閏4月1日に黒崎着、翌2日は飯塚出発、途中境迎(酒迎え・坂迎え)を受け、3日にめでたく旅の千秋楽を迎える事が出来ました。

(平山 明)



長崎街道の石畳(筑穂町)

〈註〉

この「ちくしの散歩」⑩は、山田好廣家(筑紫野市山家)の「伊勢参宮道中日記」をもとに記述したものである。